

夫婦パスタ日記

第2話 『フライパン1つで作るナポリタン』

第一稿

作・壽倉 雅

登場人物

長 沢 唯（30）
パティシエ
唯の夫、グラフィックデザイナー

長 沢 恒 吉（73）
聡志の祖父
長 沢 敏 江（70）
聡志の祖母

8 歳当時の聡志

純喫茶のマスター
聡志と唯の同級生たち

1 マンション・全景（朝）

2 同・長沢家・夫婦の部屋

ベッドで眠っている唯。

3 同・同・聡志の仕事部屋

領収書の整理をしながら、パソコンで
記帳をしている聡志。

聡志（N）「唯の休日は、勤務先の定休日である火曜日と、シフト制で週に一回もう一日休みを取る完全週休二日制だった。僕が広告代理店に勤務していた頃は休みが合う日があまりなかったが、個人事業となって何とか休みの調整ができるので、実質僕も火曜日を個人事務所の休日扱いということにしている。だが、休みではあっても雑務はいろいろある。意外と苦手なのが、領収書の整理と帳簿への記帳だ。理数系は中学時代から特に弱くなり、今になって数学をもう少し勉強しておけば良かったと後悔し

ている」

聡志、作業を終え、領収書の束をクリップで留めると、隣の寝室から物音が聞こえる。

4 同・同・廊下↓D K

聡志、仕事部屋から出ると、ちょうど寝室から唯が出てくる。

聡志「おはよう」

唯「（大きなあくびをして）ああ、おはようと、洗面所へ入っていく。

5 同・同・脱衣所

ドライヤーで髪をといている唯——廊下から聡志の声が聞こえる。

聡志の声「なあ、今日パスタ作るって言ってたけど、本当に作るの？」

唯「作るよ！」

6 同・同・廊下↓D K

脱衣所のドアの前に立っている聡志。

聡志「何作るか知らないけど、材料買ってこようか？」

と、脱衣所から唯の声が聞こえてくる。

唯の声「大丈夫。昨日のうちに、冷蔵庫に材料全部あるの確認したから」

聡志「ああ、そうなんだ」

と、そのままDKに向かい、台所に入ると冷蔵庫の野菜室を開ける。

野菜室に入っている、未開封のパック詰めのマッシュルーム。

聡志「……」

タイトル——夫婦パスタ日記

第2 話『フライパン1 つで作るナポリタン』

7 マンション・長沢家・DK

台所の冷蔵庫の野菜室——マッシュルームの他に、玉ねぎとピーマンが入っ

ている。それを見ている聡志。

聡志「冷蔵庫を開ける――パーシャルの中に入っているバターと、開封済みのウインナー。」

と、ヘアゴムで髪を縛りながら唯が入ってくる。

聡志「分かったぞ。唯が何を作るのか」

唯「え？」

聡志「ナポリタンでしょ」

唯「（目を見開いて）何で分かったの」

聡志「だって、マッシュルーム入ってたし」

唯「さすが聡志。よく分かったね」

聡志「材料切るの大変じゃない？ ナポリタンって結構手間かかるけど。もう少しシンプルなパスタでも良いよ」

唯「手間がかからないように、作るの」

聡志「どういうこと？」

唯「私はさ、聡志みたいに要領よくパスタは作れないでしょ。でもね、手間かけずにできるナポリタンのレシピ、見つけたんだよ

ねえ」

と、スマホを手にとると、料理アプリを立ち上げて、ナポリタンのレシピ動画を聡志に見せる。

×

×

×

インサート・スマホ画面。

ナポリタンのレシピ動画。

×

×

×

聡志「なるほど、ワンパンで作るナポリタンってやつか」

唯「最近多いんだよ、フライパン一つで作るワンパンのパスタのレシピ」

聡志「茹で加減難しいんだよなあ、まあ洗い物が減るっていう面でや良いんだろうけど」

唯「今日、仕事良いの？」

聡志「軽い事務作業ぐらいかな。せっかく唯が休みなんだし」

唯「見られると恥ずかしいから、仕事してて」
聡志「はいはい」

と、唯の頭を一度撫でると、再び仕事

部屋に入っていく。

唯、水道から水を出して、手を洗う。

8 同・同・聡志の仕事部屋

パソコンで事務作業をしている聡志――
ふと手を止めると、高校時代の出来
事が脳裏に蘇る。

9 高校・調理室（回想）

調理実習の後――六人前後の班にそれぞれ分かれて、作った『チャーハン』
を食べている――各班の中にいる聡志
と唯。

唯「しよっぱツ！」

同級生 A「うわ、何これッ……」

聡志、振り向いて、

聡志「どうした？」

唯「何か、味が変」

聡志「え？」

と、スプーンを持って唯たちの班に行

き、チャーハンをすくって食べる。

聡志「（険しい顔で）何だ、これ」

唯「おかしいな。塩多すぎたのかな」

聡志「（何かを察して呆れ顔で）なあ、塩どれぐらい入れた？」

唯「どれぐらいって、ちゃんとひとつまみだよ」

聡志「本当にひとつまみか？ ちょっとジェスチャーでやってみろ」

唯「（『ひとつかみ』の仕草で）こうやって、塩を」

聡志「それは、『ひとつまみ』じゃなくて、『ひとつかみ』って言うんだよ」

唯「え……」

聡志「『ひとつまみ』っていうのは、こういうこと（と『ひとつまみ』の仕草）」

10 マンション・長沢家・聡志の仕事部屋

（現在）

聡志、席から立ち上がって、出ていく。

11 同・同・D K

台所で材料を切っている唯——聡志が入ってくる。

唯「どうしたの？ できたら呼ぶけど」

聡志「いや……その、塩の分量間違えないかなあと思つて」

唯「（膨れっ面になり）失礼な。ちゃんとレシピ通りにやります。それに、今回は塩使わないし」

聡志「え、そうなの？」

唯、スマホの料理アプリを聡志に見せる。

聡志「あ、本当だ。じゃあ、大丈夫」

唯「もしかして、高校の調理実習の話？」

聡志「ああ」

唯「あつたね、そんなこと。私が塩の分量間違えてさ」

聡志「同じ班の奴らも、気づかなかったのかな。ひとつまみと、ひとつかみ」

唯「調理実習っていうだけで舞い上がったんだと思う。けどさ、あの時、よく私が塩の量間違えたって気がついたよね」

聡志「何でだろう。何となく、唯が入れたような気がした」

唯「私を戦犯扱いしないでよ」

聡志「戦犯じゃなくて、実行犯な」

唯「あ、そうか……」

聡志「邪魔してごめん。できたら呼んで」

唯「はいはい」

聡志、再び出ていく。

12 同・同・聡志の仕事部屋

棚から保育園から高校までの卒業アルバムを取り出す聡志——順番にアルバムを見ていく。

アルバムの中に写っている聡志と唯、各学校行事の写真で、聡志と唯が一緒に写っている。

聡志（N）「アルバムの写真を見ると、

高確率で唯と一緒に写っていることに気がついた。結婚をしてから、これまでの卒業アルバムを見るのは初めてだったが、この時から、唯と一緒になるのは運命だったのかもしれないと、僕は思っていた」

13 同・同・D K

取り皿に置いてある、斜め切りのウインナーと、みじん切りにされたニンニク。

玉ねぎを薄切りにしている唯。

唯（M）「過去の塩事件を蒸し返されたけど、あれも今となっては良い思い出。さて、私は今アプリの料理レシピ動画を見ながら、調理を続けている。ウインナー六本は斜め切りにし、二片のニンニクはみじん切りにした。レシピ動画では、市販のおろしニンニクでも可と言っていたが、ここはあえてちゃんと忠実にしてみた。玉ねぎ一つは皮を剥いて、半分に切り、薄切りにする。野

菜室で冷やしておいたので、目がショボシ
ョボする心配もない」

× ×

以下、調理工程をカットバックで。

マッシュルームをスライスしている唯。

唯（M）「最後に、昨日仕事帰りに立ち寄つ
たスーパーで買ったマッシュルームを四つ
スライスする」

× × ×

コンロの上にフライパンを置く唯――

ふと、腕を組む。

唯（M）「待てよ……。このまま、レシピ通
りで終わって良いのかな」

14 同・同・聡志の仕事部屋

唯が入ってくる――デスクに向かって
いた聡志が、振り向く。

聡志「どうした？」

唯「ナポリタン作るんだけどさ、何かアレ
ンジできないかな」

聡志「アレンジ？」

唯「うん。何かレシピ通りに作るのもつまらないなあと思って。どうせ作るんだっとなさ、何かオリジナリテイがあったほうが良いじゃん」

聡志「オリジナリテイって言われてもな……」

と、腕を組みながら、椅子を左右に揺らす。

唯「何か具材追加しようと思ったんだけどさ、冷蔵庫にも野菜室にも、これといってナポリタンの具材にできそうなもの、他になかったし」

聡志、じっと考えていたが、やがて、

聡志「あ、卵はどう？」

唯「卵？」

聡志「うん。子どもの時にさ、名古屋のおじいちゃんとおばあちゃんのところ遊びに行くと、常連だっという喫茶店にいつも連れてってくれてさ」

15 鉄板ナポリタンを作っているイメージ映像

像

聡志の声「『鉄板ナポリタン』っていうのが名古屋名物にあるらしくてね、ナポリタンが鉄板の上に乗った状態で運ばれてくるんだよ。で、よく見ると、下に卵が敷いてあってね、鉄板の熱で薄焼き卵みたいになつてて、ナポリタンと一緒に混ぜると美味しかったんだよ」

16 マンション・長沢家・聡志の仕事部屋

唯「ああ、鉄板ナポリタンかあ。何かで見たことあるわ。そういえば忘れてたけど、聡志の亡くなったおじいちゃんとおばあちゃん、名古屋の人だったね」

聡志「父さんも、それ食べて育ったみたいなこと言ってた」

唯「お盆とかお正月、よく帰ってたんでし

よ？ ほら、いつも私にさ、名古屋のお土産だつて言つて、地域限定のお菓子とかく

れたじゃん」

聡志「そんなこともあったなあ。（と笑って）さすがにうちに鉄板はないけどさ、フライパンに油引いてさ、薄焼き卵作って、その上にナポリタン乗せれば、それっぽい味にはなると思う」

唯「卵ねえ。じゃあ、先に薄焼き卵作ったほうが良いね」

聡志「うん。パスタの皿、耐熱だからさ、先に卵敷いといて、盛り付ける直前に少しレンチンすれば良い感じになると思う」

唯「ありがと、作ってみるわ」

聡志「楽しみにしてるぞ」

唯「ハイハイ。（とデスクのアルバムに気づいて）何、アルバム見てたの？」

聡志「うん」

唯「また懐かしいの取り出したね」

聡志「見てごらんよ。俺たち一緒に写ってる写真、結構あるんだよ」

唯「（アルバムを見て）本当だ、全然気づか

なかった。この時から、私たち一緒になる
運命だったのかな？」

聡志「それ、俺も同じこと思った」

唯「本当に私たちは考えること一緒だねえ」

聡志「何年一緒にいると思ってんだよ」

唯「（苦笑して）それもそうか」

17 同・同・D K

唯、冷蔵庫から生卵を四個取り出す。

× × ×

ボウルに、生卵を二つ割り、菜箸で溶
く唯。

唯（M）「まず生卵を二つ割って、溶く。卵
は普段、仕事で嫌というほど割っている」

× × ×

唯、フライパンにサラダ油を垂らして、
キッチンペーパーで塗る。

唯（M）「フライパンにサラダ油を適量垂ら
して、キッチンペーパーで塗る」

× × ×

唯、フライパンの上に、溶いた卵を全体に流す。

唯（M）「中火で熱してしばらくしたら、溶いた卵を流す。フライパン全体に広がるように回転させ、中で黄色い円を作る」

× × ×

唯、食器棚から皿を取り出し、フライパンの薄焼き卵を乗せる。

唯（M）「これで、下に乗せる卵は完成。残りの生卵二個も、同じ要領で薄焼き卵にしていく。後はこの上にナポリタンを乗せれば、鉄板ではないものの、名古屋風のナポリタンに仕上がる」

× × ×

唯、水道の水を出し、フライパンを軽く水洗いをする。

× × ×

唯、コンロの上にフライパンを乗せる。

唯「さて、メインを作りますか」と、アプリの料理動画を見始める。

18 同・同・聡志の仕事部屋

家族写真の入っているアルバムを見て
いる聡志。

聡志（M）「懐かしいな、名古屋の鉄板ナポリタン」

19 名古屋の街（イメージ・回想）

聡志（N）「お盆と正月の年二回しか名古屋に行く機会はなく、祖父が心筋梗塞で急死したのは、僕が小学五年生の冬だった。祖母は祖父が亡くなって数年のち、胃癌を患った。大腸と肺にも癌細胞が転移し、僕が高校一年の夏に亡くなった」

20 名古屋・喫茶店・表（回想）

『純喫茶』の看板が立てられている。

聡志（N）「僕の記憶の中では、名古屋の喫茶店に最初に連れていってもらったのは、小学二年生だったはず。昔ながらの『純喫

茶』という看板が立てられていた」

聡志（当時 8 ）が、祖父・恒吉

（73 ）と祖母・峰代（70 ）と共に
やってくる。

21 同・同・店内

マスターが、カウンターでコーヒーを
挽いている。

聡志（N）「店内では、マスターが自ら挽く
コーヒーの香ばしい香りが漂っていた」

と、恒吉、峰代、聡志が入ってくる。
マスター「おお、ツネさんいらっしやい」

恒吉「今日は母ちゃんと孫も連れてきただよ」

敏江「どうもマスター、やっとかめだのん」

マスター「やっとかめってほどこやあ？ 先
月、確か三人ぐらいで来とったがね」

敏江「ああ、来たわ。アキちゃんとミツちゃ
んと。（と苦笑して）全然やっとかめじや
ないがね」

聡志（N）「ちなみに『やっとかめ』という

のは、名古屋弁で『久しぶり』という意味だ」

マスター「（聡志を見て）ほお、その子が横浜におるっちゅうお孫さんかや。えれーツネさんと似とるがね」

聡志「こんにちは」

マスター「はい、いらっしやい。ゆっくりしてってちようよ。（とテーブル席を指して

恒吉に）そのテーブル席に」

恒吉「いつものナポリタン頼むわ」

マスター「はいよ、ナポリタンね。今から準備するもんで、待って」

テーブル席に座る恒吉、敏江、聡志。

×

×

×

マスターが、カートを引いて鉄板ナポリタンを運んでくる。

恒吉「おお来たがね、来たがね」

マスター「はい、鉄板ナポリタンお待ちどうさまね」

と、三つの鉄板ナポリタンをテーブル

に乗せる。

聡志、不思議そうに鉄板ナポリタンを見つめる。

恒吉「これが、めっちゃめっちゃうみゃーだよ。

ほら聡志、食ってみい」

聡志「おじいちゃん、何これ？」

恒吉「おみゃー、『鉄板ナポリタン』も知らんのきゃあ。これ食ったら、ハマるだよ」

敏江「慌てることはにやーて。ええて、ええて、ゆっくり食べやあ」

聡志・恒吉・敏江「いただきます」

と、それぞれ食べ始める。

聡志「これ、すげえ美味い！」

恒吉「そりや美味いに決まっとるわ。これがこの店の名物なんだでよ」

敏江「ここの鉄板ナポリタン食べたら、他の店のナポリタンなんて食べれーせんわ」

マスター、カウンター越しに、

マスター「いつでも食べにきてちよーよ」

恒吉「やっぱ、ナポリタンには薄焼き卵が乗

つとらんと話にも何にもなりやせんわ。卵のないナポリタンなんて、カレーにニンジンが入つとらんようなもんだなも」

マスター「当たり前だがね。卵がありやせん
と、何のために鉄板で用意しとるか分
かりやせんわ」

敏江「何なら卵食べとるようなもんだわ。も
うどっちがメインか分からんぐらい、卵の
存在は絶対だがね」

聡志（N）「名古屋へ行つた時、他の店で鉄
板ナポリタンを食べることはなかったが、
ぼんやりではあるものの、どこのカフェや
喫茶店でも、ナポリタンは常に鉄板の器に
乗っている印象だった。おそらく店前の食
品サンプルで見たのかもしれないが」

21 マンション・長沢家・聡志の仕事部屋

（現在）

アルバムを閉じる聡志、アルバムを棚
の中に片付ける。

聡志（N）「名古屋やその周辺にあるカフェや喫茶店に行くことがあったら、鉄板ナポリタンを食べてみたいと思っていた。最後に名古屋へ足を運んだのは、祖母が亡くなってから一年後、一周忌の法要のために親戚が集まった時だ。愛知県内に住む叔母夫婦が後のことを全て引き受けたことと、三回忌や七回忌といった節目の法事はやらな」と親戚一同で決めたことから、名古屋に行く目的もなくなってしまった」

聡志、もう一度デスクの椅子に深く座り込む。

聡志（N）「祖父が亡くなってから、あの純喫茶に行かなくなったことをふと思い出した。あの時点で、マスターはおそらく祖母と同年代だった印象だ。もう祖父の死から二十年以上が経っているので、マスターは現役を退いて店を譲ったか店を閉めただろうし、もしくはもう亡くなっているかもしれない」

聡志「あの店、どうなってるんだろ……」

聡志、スマホを取り出すと、『名古屋
純喫茶』とアプリで検索をする——い
くつもの店舗が検索にヒットする。

聡志（M）「うわ、めっちゃある……」

聡志（N）「名古屋に純喫茶と呼ばれる店は
何十店もあるらしい。だが、祖父たちとい
ったあのお店の名前は覚えていなかった。
今になって、それを後悔している」

聡志、諦めたように、スマホの画面を
オフにし、再びパソコンに向かって仕
事をする。

と、DKの方から具材を炒める音が聞
こえてくる。

聡志（M）「鉄板ではないものの、薄焼き卵
が敷かれているナポリタンを食べるのはい
つ以来だろう。ナポリタンを作ろうとして
いることと、アレンジしたいと言い出した
ことで、懐かしい子どもの頃の記憶を蘇ら
せてくれた唯に、僕は感謝していた」

22 同・同・D K

アプリのレシピ動画に従いながら、唯がフライパンで、ウインナーを炒めている。

唯（M）「フライパンにオリーブオイル大さじ二杯と斜め切りしたウインナーを中火で炒めていく」

× × ×

唯、玉ねぎ、ニンニク、マッシュルームを入れて、更に炒めていく。

唯（M）「ウインナーに火が通って反り始めたら、薄切りにした玉ねぎ、みじん切りにしたニンニク、スライスしたマッシュルームをフライパンの中に入れて、更に全体に火が通るまで炒めていく」

× × ×

唯、フライパンに計量スプーンに入れたトマトケチャップとウスターソースをそれぞれ追加して炒めていく。

唯（M）「玉ねぎが透明になりしんなりして、ニンニクやマッシュルームに火が通ったら、トマトケチャップを大さじ六杯と、ウスターソース小さじ二杯を入れる。ケチャップの水分と酸味が飛ぶまで、具材全体に絡めるように炒めていく」

× × ×

唯、計量カップの水と計量スプーンに入れたコンソメの素をフライパンに追加する。

唯（M）「具材全体が赤くなりトマトケチャップとウスターソースが絡まったら、水七百ミリリットルと、コンソメの素小さじ二杯を入れて、水が沸騰するまで待つ」

× × ×

フライパンから水がブクブクと沸騰する。

唯、パスタの麺二百グラムを入れて水の中に浸かるようにトングでゆつくりと入れていく。

唯（M）「水が沸騰したら、パスタ二百グラムを入れて、規定の時間プラス三分、ここでは十分煮込んでいく。フライパンの底が焦げないように、随時混ぜ合わせる」

× × ×

唯、ピーマンを輪切りにする。

唯（M）「パスタを煮込んでいる間に、ピーマン二つのへたと種を取り除き、輪切りにする」

× × ×

十分後——フライパンの水分がほぼなくなっている。

唯、フライパンに、輪切りにしたピーマン、トマトケチャップ、バターを入れ、トングで全体を和えるようにして炒めていく。

唯（M）「十分経ったら水分がほとんどなくなっていた。そこへ、輪切りにしたピーマン、追いケチャップとしてトマトケチャップを大さじ二杯、バター十グラム入れたら、

弱火にして全体を和えるようにして炒めて

いく」

×

×

×

唯、薄焼き卵が乗った皿を順番に電子レンジに入れて、三十秒温める。

×

×

×

皿の上に、完成したナポリタンを盛り付ける。そして、パセリと粉チーズを振りかける。

唯（M）「温めたお皿の上にナポリタンを盛り付け、パセリと粉チーズを適量振りかける」

唯「よし、できた！」

23 完成した『ナポリタン』

24 マンション・長沢家・DK

唯、完成したナポリタンをスマホのカメラで撮影する。

唯「（廊下に向かって）聡志ッ、できたよ」

と、仕事部屋から聡志の声がする。

聡志の声「はい」

と、聡志が入ってくる。

聡志「お、良い匂いがする」

唯「ねえ、どう。鉄板ナポリタンみたいにな
ってるかな？（と皿を見せる）」

聡志「うん。この色彩は、まさに鉄板ナポリ
タンだよ」

唯「名古屋で食べたのと、似てる？」

聡志「似てる。懐かしいな、この感じ。じい
ちゃんたちと食べたのも、こんなような鉄
板ナポリタンだったなあ」

唯「じゃあ、食べようか」

聡志「おお」

×

×

×

テーブルに向き合っている唯と聡志。

唯・聡志「いただきます」

と、それぞれ食べ始める。

唯「どう？ 一応、レシピ通りには作って
みただけ」

聡志「美味しいよ。何か、名古屋の純喫茶の味思い出した気がする」

唯「良かった」

聡志「（手を止めて）あのさ、唯」

唯「どうしたの？」

聡志「今度、旅行行かない？」

唯「良いよ。どこ行くか決まってるの？」

聡志「名古屋。唯にさ、本場の鉄板ナポリタシっていうのを食べさせたいんだよね」

唯「とか言って、本当は自分が食べたいんでしょ？」

聡志「バレたかぁ」

思わず笑い合う唯と聡志。

聡志「あれから気になってさ、調べてみたんだよ。昔じいちゃんたちに連れてってもらった純喫茶がどこだったのか。ただ、名前も覚えてないし、もう二十年以上前だから、もしかしたらもう閉店してるかもしれない」

唯「そっか。まあ、名古屋だと鉄板ナポリタシの店なんてたくさんあるだろうし、聡志

が昔食べたっていうそのお店見つけるのは
難しいかもね」

聡志「うん……」

唯「私も食べてみたいけどね。本場の鉄板ナ
ポリタンっていうやつ」

聡志「旅行行けるように、仕事頑張るかぁ」

唯「無理はしないでね。いくら個人事業だか
らって言っても、休むのも仕事のうちだと
思わなきゃ」

聡志「うん」

唯「私も、まずはバレンタインっていう佳境
を乗り越えなきゃなあ」

ナポリタンを食べ進める唯と聡志。

おわり